

Ⅲ キリスト教思想史の諸問題

<前回> 創造論の諸問題—創造と契約—

1. 創造：言語行為→存在→善（存在意味・固有の価値）
 - 神の絶対的活動性（神中心主義）
 - 神の目から見て無意味なものなど一つもない
 - 神の判断に逆らって存在意味がないなどと言ってはならない
 - 障害においても、老いの中においてもなおも、「にもかかわらず」意味がある・価値がある（→ 「存在の尊厳」、ヘルムート・R・ニーバー）
2. 二つの創造物語→人間についての二つの基本的見方（モデル）
 - 「神の像」：人間の固有性、「土から土へ」：他の生命体との連帯性・同質性
3. エデンの園におけるアダム：土（園）を耕し、生き物に名前をつける。
 - 技術と科学の原型となる知恵、知者アダム
4. 契約（約束と信頼、人格間の関係構築、責任と罰）→ 信頼の根拠についての物語
 - =創造物語
5. Q：創造論は男性中心主義あるいは人間中心主義か？→ エコ・フェミニズム
 - すべてが善であるとすれば、悪はどこから？

第1講：聖書の思想世界と科学——知恵と終末——

1 知恵思想と科学

(1) 成立の歴史的背景

1. 旧約聖書において「知恵文学」に分類されるものとしては、ヨブ記、詩篇の一部、箴言、コヘレトの言葉が挙げられ、その他に、外典の知恵の書、シラ書（集会の書）が存在する。知恵の伝統は、バビロン捕囚期以前に遡るものであるが、創造や契約をめぐる諸思想を前提として、それを古代イスラエル民族が置かれた歴史的状況において展開したものと解することができる。つまり、王国形成・崩壊からバビロン捕囚にかけての時代状況——地中海・オリエント世界そしてヘレニズム世界の国際関係——において、古代イスラエルが直面した諸問題が知恵思想の背景をなしている。
2. 知恵文学の成立の場

では、以上のような知恵思想は具体的にどのような文脈で形成されたのであろうか。フォン・ラートらの旧約聖書研究に従うならば、古代イスラエルの知恵思想は、次の二つの問題連関において成立したことがわかる。

(1) 共同体の知恵（伝承）

(2) 対外的な国際関係が要求する国際的な知恵

小国イスラエルにとって厳しい国際情勢の中で、国家を存続させるに必要な知恵は、国家のアイデンティティを支える伝統的知恵と国際的に標準的な知恵とという二つの知

恵なのである。また、こうした知恵思想の担い手としては、古代イスラエルの王制における宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成学校の知識人が考えられる。

3. 共同体の知恵

人類の歴史の中で、宗教はそれが属する共同体固有の知の担い手として存在してきた。共同体のメンバーとして「正しく」生きるために習得すべき知恵（＝慣習的知恵）は、宗教的知恵の主要部分を構成している。その中で、因果応報原理は中心的な役割を果たしている。

4. オリエントの知恵文学の伝統と「ヤハウエ信仰」の国際性

しかし、旧約聖書の知恵は、伝統的な共同体の知恵を集大成しただけでなく、イスラエル共同体外部へ開かれた国際的な知恵という性格を合わせ持っており、その点で新しい歴史状況に対応したヘブライ思想の普遍化の一側面と考えられる。

(2) ヘブライ的知恵文学の思想的特徴

次に知恵文学において表現されたヘブライ的な知恵思想の特徴についていくつかの点をまとめておこう。

①創造の知恵、あるいは知恵による創造

世界に内在する法則性への信頼→神への信頼＝「神への畏れ」

知恵思想は創造論を前提とし、それを展開する内容をもっている。この点は、以下に引用した箴言8章において、「知恵」は神の創造の始めに立ち会い、さらには創造に参与した——知恵の人格化あるいは擬人化——、と語れるとおりである。知恵による天地の創造は、万物に神の善意志、神の合理性が反映していることを、したがって、世界には合理的法則性が内在することを論理的に帰結する。こうした創造論の知恵思想への展開が西欧近代における世界の知的探究（＝自然科学）にまで至るには、長い道のりを必要とするが、後に論じるように、聖書の創造論・知恵思想は近代自然科学の背後に存在していたのである。

②神の創造行為の探求と称賛としての科学 → 自然を通した神の讃美

以下引用の詩編第19編は、天地が神の被造物であり、その見事な秩序・仕組みは神の偉大さを証言していることを歌っている。こうした知恵思想が、後に論じるキリスト教的な自然神学（書物としての自然）を生み出す源泉の一つとなり、科学者（ケプラー、ガリレオ、そしてニュートン）の自然探究を動機づけることになる。

③「知恵のある生活」

以上の①と②は、知恵思想と自然探究との関わりを示す特徴であり、本講義のテーマとの関係で強調したい点ではあるが、旧約聖書の知恵思想の中心点は、むしろ日常の実践に関わる知恵にある。箴言14章などに見られる一連の対照（「神を畏れる一神に逆らう」→「知恵一無知」、「正しい一悪しき」、「謙虚一高慢」）からもわかるように、知恵は共同体において正しく・賢明に生きることを可能にする実践的知恵であり、既に指摘した共同体の知恵なのである。共同体の一員として幸福に生きるために身につけるべき慣習・規則などであり、それは世代から世代へと伝承された知恵である共同体の知恵は共同体の集団的な自己同一性の核心に属している。

④因果応報とその限界

こうした共同体の知恵の中心にあるのが、「因果応報」である。共同体の秩序を維持するためには、共同体のメンバーがその秩序を尊重することが必要である。それには、共同体において正しいと了解された行為を行うならば幸福になり、悪い行為と見なされたことを行えば不幸になる、ということ（＝因果応報）が、共同体全体において合意されていなければならない——それが建前であっても。しかし、多くの人が因果応報に疑いをもつに至るとき、共同体の秩序は一挙に流動化する——。この合意を支えるのが宗教的権威であり、教育システムなのである。

しかし、不幸なことに、共同体の歴史や個人の人生においては、こうした因果応報では処理できない事態がしばしば生じ、人間はその前に立ちつくすことを余儀なくされる。旧約聖書の知恵文学の特徴は、この因果応報の様々な破れを鋭く描き、因果応報の限界をはっきり見据えている点に認められる——それは、イスラエル民族の歴史が危機的状況の中で混迷を深めるのに応じているかのようなようである——。「コヘレトの言葉」は、様々な努力が必ずしも幸福をもたらすものではなく、人生は空しいことを述べ（「なんとという空ししさ、なんとという空ししさ、すべては空しい」）、「ヨブ記」は、正しく生きる人間（義人）が不幸になる、という問題（義人の苦難）を執拗に追求している。

（3）知恵の教師イエス：伝統的な知恵に対する転換的な知恵

イエスとはだれであるかについて、聖書には様々な答え（キリストの称号）を見いだすことができる。その一つが、以下に引用するヨハネ福音書の「ラビ」「教師」である。知恵の教師イエスというイエス理解は、知恵思想が旧約聖書から新約聖書へと受け継がれていることを示唆している。

ただし、新約聖書研究者クロッサンが指摘するように、イエスを古代イスラエルの知恵思想の伝統に位置付ける場合に留意すべきは、イエスの知恵思想が先に述べた共同体の知恵とは、別のタイプの知恵を特徴とすると考えられる点である。これをクロッサンに倣い、「転換的な知恵」と呼ぶことにする。共同体の知恵は共同体において伝承され共同体の一員として適切に生きるために身につけるべき知恵であり、そこにおいては共同体の秩序はいわば前提とされ、疑いや批判を免れるべきものと位置付けられている。それに対して、転換的な知恵は共同体の秩序を自明視するのではなく、それを批判的に相対化し、別の秩序へと転換することを促す。つまり、転換的な知恵とは優れて社会批判的な知恵であり、たとえば、福音書が記述する「安息日論争」はその典型といえる——安息日は誰のためにあるのか——。共同体の知恵（慣習的な知恵）がイデオロギー的に保守的に機能するのに対して、転換的な知恵はユートピア的革新的に機能すると規定することも可能である。キリスト教においては、この二つのタイプの知恵が相互に緊張的に結びつくことによって、独自の知恵の伝統を形成することになる。

<聖書引用>

1. 箴言

1:7 主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも論しをも侮る。8 わが子よ、父の論しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。

8:22 主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしへの御業になお、先立って。23 永遠の昔、わたしは祝別されていた。太初、大地に先立って。

11:1 偽りの天秤を主はいとい／十全なおもり石を喜ばれる。2 高慢には軽蔑が伴い／謙遜には知恵が伴う。3 正しい人は自分の無垢に導かれ／裏切り者は自分の暴力に滅ぼされる。4 怒りの日には、富は頼りにならない。慈善は死から救う。5 無垢な人の慈善は、彼の道をまっすぐにする。神に逆らう者は、逆らいの罪によって倒される。6 正しい人は慈善によって自分を救い／裏切り者は自分の欲望の罠にかかる。7 神に逆らう者は力に望みをかけ、期待しても／死ねばそれも失われる。8 神に従う人は苦難に陥っても助け出され／神に逆らう者が代わってそこに落とされる。9 神を無視する者は口先で友人を破滅に落とす。神に従う人は知識によって助け出される。

2. 詩編

19:2 天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。3 昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。4 話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても 5 その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

3. ヨハネ

3:2 「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」

2 罪と悪

前回の講義のテーマであった創造論（とくに創造の善性）は、ただちに大きな疑問を生じることになる。では、「悪はどこから？」(Unde Malum?)。一切の存在は神の目から見ればすべて良い・有意味であるとの主張は、悪のアポリアを帰結する。実に、悪の問題は聖書の宗教にとっての難問である。また、今回の講義ですでに論じた知恵思想における転換的知恵やこの後に論じる終末において問題化する現実世界（既存の共同体的秩序、この世）の現実は、不幸と苦難と悪に満ちている。知恵思想と終末思想で問われているのは、まさに悪をめぐる諸問題に他ならない。ここで、終末思想に先立って、罪と悪を聖書テキスト（とくに、創世記第3章のエデン神話）に基づいて論じるのは、以上の点からも当然の展開と言える。

しかし、本講の研究ノートはすでにかかなりの分量に達しているので、以下、議論（罪と悪、そして終末についての議論）は、その要点を箇条書的に記すにとどめたい。

(1) 罪の起源神話

〈エデン神話〉(創世記2～3章)

「2:16 園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して

て食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」

「3:1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」2 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」

1. エデン神話に基づいて考えるとき、罪はどこからやってきたことになるのか？

その場合の人間の責任とは？

↓

- ・旧約聖書の現実主義：性善説と性悪説の間の現実
- ・神話という語り方の意義（言語的文学的機能）
解釈の多様性を残しつつ、解釈を促す（リクールの悪のシンボリズムの研究）
- ・へび：善悪二元論
女：身体・欲望＝悪
男：自由意志論
神：神義論

2. エデン神話の背景と解釈

- ・J文書：歴史的人間の現実性への洞察（人間論）
- ・ユダヤ教における罪論の基本テキストではない→契約論における罪の問題
- ・「墮罪→原罪」というキリスト教的罪論における解釈

パウロ→アウグスティヌス

「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。」（ローマ 5:12）

3. 聖書の人間理解：リアリズム＝善と罪との両義性、人間は両義的存在である

(2) キルケゴールの罪論

- 4. 単数形の罪（存在としての罪、Sin）、複数形の罪（行為としての罪、sins）
- 5. エデン神話・原罪の問題は存在レベルの罪、関係の歪みとしての罪
- 6. 人間は関係性の内に（関わり合いにおいて）人間として生きている。

『死に至る病』（1849年、岩波文庫）：

「死に至る病とは絶望のことである」（第一編）、「絶望は罪である」（第二編）

人間学と絶望の現象学

罪論

「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものなることが含まれている、——それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。」（18頁）

6. 罪の根源性

「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」(ローマ7. 19)

他者の犠牲において存在している人間

生きるという罪、正しい忠告にあえて逆らう心の傾向

7. 関係存在としての人間(固有性と連帯性)

自己関係・他者関係・神関係の三つの関係における歪みの相関性

問題の根源は神関係にある

8. 罪の連帯性・連鎖性・重層性

・知らないことにおける連帯責任 → 知ることの責任

・罪は連鎖を生み出す(復讐の連鎖、罪の自己増殖性) → 破壊の構造的性

・人間以外の生命/貧しい者/有色人種/女性 → 被害者とは誰か

9. 問題:被害者の恨み(ハン)に解決はあるのか

罪人の赦しに対する被害者の癒しの問題

3 イエスの福音と終末

新約聖書研究者ボーグが指摘するように、イエスが黙示的終末論の宗教家であるということは、20世紀の新約聖書学の合意事項に属しており、聖書学を超えて、神学全般で共有されてきた認識である。しかし、1980年代以降の新約聖書学において、この合意事項については様々な批判、疑問が提起され、いまや、合意は崩れ、黙示的終末論の位置は相対化されてしまった。この間に新たに提出されたのが、先に論じた知者イエスという知恵思想の伝統におけるイエス理解である。現在、イエス理解をめぐっては多くの議論が展開されつつあるが、黙示的終末論の宗教家イエスと知者イエスは決して対立し合うばかりではない。両者ともに、イエスの宗教運動が、「神の国運動」である点では、基本的に一致しているように思われる。

以下の議論の詳細な内容については、前期講義(第8講3)を参照いただきたい。

1. 新約聖書学→仮説・蓋然性における結論(伝承史を逆に辿る)

イエスの伝記的事項については大まかなことしか言えない(福音書は伝記ではない)

↓

イエスの教えについてかなりの蓋然性で言えること

2. イエスの福音

①「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ 1:15)

②「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(マルコ 10:24b ~ 25)

3. 「神の国」の宣教

国(バシレイア): 神の制定した新しい秩序(支配)

cf: 国家機構

↓

王国

新しい契約の実現

4. 神の秩序 ↔ この世の秩序(古い秩序) = 罪(ハマルティア)

階層性・二分法・対立

的はずれ

cf: 規則の侵害

関係の歪み(神関係、自己関係、他者関係)

5. 神の秩序の実現＝古い秩序の転換＝罪の解決＝救済 → 福音
 ↓
 「山上の説教」(マタイ 5～7 章)
 イエスの活動 (教え・論争・癒し)
6. 終末論の類型：預言者的、黙示的 → 意味の拡張
7. 終末：生と死の最終的決着の時、罪の問題の最終的解決
 → 神との完全な関係の実現・本来的な人間性、正義の実現
8. 宇宙的ヴィジョン (ドラマ化) → 罪と悪に対する勝利、ハルマゲドン
 - 1) ヘレニズム的な文化環境への適応
 - 2) 民族宗教の再建 → 普遍化：預言者、知恵
 黙示文学
 ダニエル書、エズラ書、ヨハネ黙示録 (アポカリプシス)
9. 迫害・抵抗文学 → 象徴、暗号
 獣、「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」
10. 善と悪の最終的戦いと善の勝利 (ハルマゲドン)： 思想的な特徴
 - 1) 善悪二元論
 - 2) 終末・時の切迫の実感 → 迫害下の教会への励まし (最後まで耐え忍ぶ者は幸いである、命の書)
 - 3) 宇宙論的劇的イメージ → 民族の枠組みの克服、宇宙論的メシア
 - 4) 秘密の隠された知恵
11. 黙示文学の影響
 黙示録 20:2-6 における神の国の到来以前のキリストの千年支配 → 千年王国論
12. 知恵の教師イエス
13. 慣習的知恵 (既存の秩序を肯定)、転換的知恵 (既存の秩序の転換・批判)
14. 知恵から終末論へ：人間性の回復される現実をもたらす知恵

<聖書引用>

1. ヨハネ黙示録 1 章

- 1 イエス・キリストの黙示。この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためキリストにお与えになり、そして、キリストがその天使を送って僕ヨハネにお伝えになったものである。
- 2 ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証しした。
- 3 この預言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。時が迫っているからである。

2. マルコ 13 章

- 14 「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら・・・読者は悟れ・・・、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。
- 15 屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入ってはならない。

- 16 畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。
- 17 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。
- 18 このことが冬に起こらないように、祈りなさい。
- 19 それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。
- 20 主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。

<参考文献>

1. フォン・ラート 『イスラエルの知恵』 日本基督教教団出版局
2. 並木浩一 『旧約聖書における文化と人間』 教文館
『「ヨブ記」論集成』 教文館
3. 西村俊昭 『旧約聖書における知恵と解釈』 創文社
4. 関根清三 『旧約における超越と象徴』 東京大学出版会
『旧約聖書の思想——24の断章』 岩波書店
5. クロッサン 『イエス——あるユダヤ人貧農の革命的生涯』 新教出版社
6. ボーグ 『イエス・ルネサンス——現代アメリカのイエス研究』 教文館
7. キルケゴール 『死に至る病』 岩波文庫
8. 武藤一雄 『神学と宗教哲学との間』 創文社
9. 大木英夫 『終末論』 紀伊國屋新書
10. 芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』 世界思想社